

米芾の学書について

About the way of Mi-Fu's learning calligraphy

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

吉 田 悟

Satoru yoshida

．はじめに

米芾・字は元章（1051～1107）は、北宋期を代表する能書家であり、また単なる能書家であるに止まらず、絵画や文房などにも精通し、著作も『書史』『寶章待訪録』『畫史』『硯史』『寶晋英光集』など広範なものを残している。幸いなことに今日我々が見ることができる米芾の作品は、刻帖を併せれば膨大な量となり、北宋期だけでなく、中国の書道史上においても卓越した能書家であることを認めることができる。

米芾の書風は、それまでの書の持つ魅力を総合して、更に米芾独自の風格を築き上げたということができる。その手腕は、中国書道史の中でも卓越している。本論文ではその米芾の手腕を、米芾の学書という観点から分析していきたいと思う。

．収蔵とは

今日我々が書を見ようとすれば、まず展覧会に行くか、図録を見るか、美術館の常設展などを見ようとするであろう。個人的に収蔵する人もいると思うが、それはごく一部で、よほどの財力がなければそれは難しい。一般的に見て、普通の人が学書をするとなれば、使うものは作品集という印刷物である。

今から取り上げる米芾が生きた時代は、学書をする原本は真蹟そのものか、摸本であった¹。当然こういったものは、お金を出して購入するか、収蔵品がある程度たまってくれば、これを物々交換によって入れ替えていくという方法によって手に入れるのである。また、そうした収蔵家同士で貸し借りをして学書をしていたようである。そういったある意味では駆け引きに近いやりとりが、米芾の『書史』『寶章待訪録』などで確認することができる。例えば、『書史』には次のような記事がある。

並收得褚遂良黃絹上臨蘭亭一本。乏貨之官、許余以五十千質之。余時遷葬丹徒、約王君友壻宗室時

監羅務今輒、亦欲往別約至彼交帖。王君後余五日至余。方襄大事、未暇見之事。竟見云、「適沈存中借去」。吾拊髀驚曰、「此書不復歸矣」。余遂過沈問焉。沈曰、「且勿驚破。得之當易公王維雪圖。其父嘗許見與也」。余因不復言。後數日王君携褚書見過大歎曰、「沈使其婿以二十星資其行。請以二十千留褚書」。余因不復取。後十年王君卒、其子居高郵、欲成姻事、因賀鑄持至儀真、求以二十千售之。後蘇頌丞相家與沈之子博毅同曾、問所在曰「分與其弟矣」。翌日蘇舜元子云、「屢見之」。（『書史』ⁱⁱ7段）

…余約歐陽詢真跡二帖・王維雪圖六幅・正透犀帶一條・硯山一枚・玉座珊瑚一枝以易、劉見許。王詵借余硯山去不即還。劉為澤守行兩日、王始見還。約再見易、而劉死矣。其子以二十千賣與王防。（『書史』8段）

王羲之桓公破羌帖、有開元印。唐懷充跋、「筆法入神」。在蘇之純家。之純卒、其家定直久許見歸。而余使西京未還、宗室仲爰力取之。且要約曰、「米芾有其直見歸還」。余遂典衣以增其直取回。仲爰已使庸工裝背、剪損古跋尾參差矣。痛惜痛惜。（『書史』10段）

一番目は褚遂良が臨書したと思われる蘭亭で、この文章からすると、結局これは米芾の手に入らなかったことになる。二番目は王献之の「送梨帖」についての記載で、これもこの文章を読む限りでは入手をできなかったものである。三番目は王羲之の「王略帖」についてで、最終的に米芾の手に入ったものの、古跋がちぐはぐにされている無念さを訴えている。三つの文章とも、入手にいたるまでの苦悩が描き出されている。

こうしてようやく手に入れたものは、ずっと自分の手元に残し、収蔵するということが可能ではあるが、米芾自身は、色々と新しいものを果敢に入手するという方法を好んだ。それは次に示す文章に明確である。

余家晋唐古帖千軸、蓋散一百軸矣。今惟絶精、只有十軸在。有奇書、亦續去矣。晋畫必可保、蓋縁数晋物命所居爲寶晋齋、身到則挂之、当世不復有矣。書畫不可論價、士人難以貨取、所以書畫博易、自是雅致。今人収一物、與性命俱、大可笑。人生適目之事、看久即厭、時易新玩、兩適其欲、乃之達者。（『畫史』ⁱⁱⁱ103段）

余老矣、每求新賞、與賞鑑之家博易書畫最多、不一一記、上多有印記可辨、無非奇筆。

（『畫史』90段）

そうしたことを繰り返すと、一回手に入れても、それを手放してしまえば、もう二度と見る事が

できなくなる可能性が高いわけである。だが、一回入手したものを永遠に自分のものにする方法が存在する。それは摸本・臨本・刻帖を作成するということであった。

夫金玉為器、毀之則再作。何代無工字札、使其身在再寫、則未必復工。蓋天真自然不可預想。想字形大小、不為篤論。人人若得此中妙、懷素自言「初不知」、却是造妙語。既再作不可復得、搨而藏諸、何陋之有。 (『書史』113段)

これは、・本を作るということを、積極的に捉えた文章であるが、文献にも米芾が・本を作って、自分の収蔵の品としていたことを確認できる。

虞書積時帖、古雙鉤・。在洛陽李熙處、維之孫也。縫亦有褚氏印。余嘗借・。 (『書史』51段)

一日、駙馬都尉王晉卿借觀。求之不與已乃剪去國老署及子美跋。著于模本、乃見還。 (『寶晉英光集』卷7 跋快雪時晴帖^{iv})

一番目は虞世南の「積時帖」を・したという事実、二番目は、王羲之の「快雪時晴帖」を・しておいたおかげで、王詵が古跋を切り取ってしまったにも関わらず、現物のまま見ることができたという喜びを述べたもの。いずれも米芾が・本を積極的に作っていた事実を物語る。

また米芾が臨本作成の達人であったこと(本物と瓜二つに作成できたかは別にして)は、以下の文によって証明される。

余少時臨一本、不復記所在。後二十年、寶文謝景温尹京云、大豪郭氏分内一房欲此帖、至折八百千衆。乃許取視之、縫有元章戲筆字印、中間筆氣甚有如余書者。面喻之、乃云、「家世收久、不以公言為然」。 (『書史』25段 争坐位帖)

余嘗以碧牋臨三帖、與真無異。呂復携去装褫矣。 (『書史』70段 李邕三帖)

余臨大令法帖一卷。在常州士人家。不知何人取作廢帖、裝背以與沈括。一日林希會章惇・張詢及余於甘露寺淨名齋、各出書畫、至此帖、余大驚曰、「此芾書也」。沈惇然曰、「某家所收久矣、豈是君書」。芾笑曰、「豈有變主不得認物耶」。 (『書史』82段)

余居蘇與葛藻近居。每見余學臨帖、即収去遂裝黏作二十餘帖。倣名畫記所載印記作一軸裝背。一日出示、不覺大笑。葛與江都陳叟友善、遂贈之君以為眞。余借不肯出。今在黃材家。(『書史』83段)

余臨張直清家虞永興汝南公主墓誌。浙中好事者以為眞刻石。右軍帖尤多^v。(『書史』84段)

王詵每余到都下、邀過其第、即大出書帖、索余臨學。因櫃中翻索書畫見、余所臨王子敬鵝羣帖、染古色麻紙、滿目皺紋、錦囊玉軸裝剪、他書上跋連於其後。又以臨虞帖、裝染、使公卿跋。余適見大笑。王手奪去諒。其他尚多、未出示。(『書史』122段)

他、米芾が収蔵した法帖を石に刻して「寶晉齋法帖」を作成したのは有名である^{vi}。
ところで、こうしたことにより、米芾には鑑識という能力が求められたし、またその能力にも自負していたと考えられる。

大抵画今時人眼生者、即以古人向上名差配之、似者即以正名差配之、好事者與賞鑑之家爲二等。賞鑑家謂其篤好、遍閱記錄、又復心得、或自能画、故所収皆精品。近世人或有賞力、元非酷好、意作標韵、至假耳目於人、此謂之好事者。置錦囊玉軸、以爲珍秘、開之或笑倒。余輒撫案大叫曰、「慚惶殺人」。(『書史』89段)

これは、好事者と賞鑑家の別を言ったものだが、当然米芾自身は、自らの身を賞鑑家と自覚していた。事実、米芾自身も、色々な鑑定を行い、前説を多く覆している。例えば、

余辨乃右軍書。云、「思言叙卒何期、但有長歎念告」。公權誤以為子敬也。
(『書史』8段 王羲之「稚恭帖」)

内二真字、雙鉤填者。然人猶未信為搨焉。(『寶章待訪録』^{vii}18段 智永「真草千文」)

唐越国公鍾紹京書千文。筆勢圓勁。在丞相恭公孫陳並處。今為宗室令穰所購。諸貴人皆題作智永。余驗出唐諱闕筆、及遍學寺碑對之、更無少異。大年於是盡剪去諸人跋。余始跋之。(『書史』19段)

唐辯才弟子草書千文、黃麻紙書。在龍圖閣直學士吳郡藤元發處。藤以為智永書。余閱其前、空才字全不書、固已疑之。後復空永字、遂定為辯才弟子所書。故特闕其祖師二名耳。(『書史』49段)

などである。米芾は、卓越した鑑識力を持っていたと言わねばならない。またそれだけ、出会う一

帖一帖の法帖に対する勝負感と執念があったと言う事もできる。そしてそれがなくして、『書史』『寶章待訪録』などの書物が存在しえなかったこと、言うまでもない。

以上、収蔵するという、学書行為のいわゆる準備段階的なものを考察したが、「戯」、楽しみのな雰囲気があるものの、そこには勝負感や執念さえも感じ取ることができる。

・書の動機

もう一つ、米芾にとっての学書とは何かを理解する際に、有益と思われる事実を概略的にまとめてみたいと思う。それは米芾が、いかなる条件ときっかけで書を作っていたのかということである^{viii}。

- ・ 官僚としての事務処理の書^{ix}
- ・ 尺牘
「翰牘九帖」「草書九帖」「楽兄帖」など。「英光堂帖」のほとんども、これに含まれる。
- ・ 跋・賛
「王略帖賛」「蘭亭序跋」など
- ・ 序・銘・題字・賦・詞・記
「研山銘」「第一山」「天馬賦」「大行皇太后挽詞」など
- ・ 詩巻
「蜀素帖」「苕溪詩巻」「吳舟江中詩巻」「虹縣詩巻」など

以上あげたものが、米芾が、書を嗜む者として、学書の反対に創造者となる瞬間である。学書を語る前に、この「創造者」となる瞬間を掌握しておくことは有益であろう。

またこれによって予想されること、それは当然のことであるが、米芾にとってというよりも、ペンが発達するまでの日本と中国では、筆が唯一の書く手段であり、そうなる当然、米芾にとっての学書とは、臨書、倣書、創作といった意味合いの学書ではなく、自身の字を作っていく、育んでいくという意味合いが強いということである。これは筆・墨・紙そして書が、生活に強く密着していた学書法だと言える。我々に置き換えれば、普通のペン字の字を、古典の魅力を集めて、そして古典から作り出していくと思えばよいのではないか^x。そういう事を考え合わせると、

壯歲未能立家、人謂吾書為集古字、蓋取諸長處、總而成之。 (『海岳名言』^{xi})

という言葉は、甚だ深い意味合いを持つと筆者は考える。

以上、米芾の学書とはあまり関係のない周辺の事であるが、米芾の学書という、ある意味米芾の生活に迫ることを考察する上で有益と考えたので、ページを割いた。

・米芾収蔵・目観法書考

ここでは、米芾が見た、もしくは収蔵した法帖について、ある一定の項目に区別して分類したいと思う。中田勇次郎氏の「米芾審定法書考」^{xii}と「米芾著書所見法書目録」^{xiii}、私が修士論文の時に作成したものを参考にした。

書 = 『書史』 章 = 『宝章待訪録』 珊 = 『珊瑚網』 英 = 『宝晋英光集』

名前	帖名	評価	所有	学書	臨本・跋等	出典
周鼎篆	周鼎篆	字法有鳥跡自然之状...	×	?	? ×	書
皇象	唐・急就章	奇絶、有隸法	×	?	? ×	書・章
王羲之	梁・樂毅論			?	?	書
	黄素黄庭經	六朝人書		?	跋(書史)	書・章
	唐・黄庭經	有鍾法	×	?	?	書
	碧綾黄庭經	褚遂良書、非也	×	?	?	書
	東方朔画贊	欧陽詢補之	×	?	?	書
	十七帖	毫髮乾濃畢備	×	?	?	書・章
	十七帖	劉涇所有		?	?	書
	双鉤十七帖	有精彩	? ×	?	?	書
	褚・黄絹上臨蘭亭		×	?	?	書
	唐絹本蘭亭	劉涇所有	×	×	×	書
	蘭亭三本	毫髮畢備、下真蹟一等			?	書
		行書第一、多卒意			?	書
		唐・、粉蠟紙			?	書
	唐刻板本蘭亭	有鋒勢筆活、三米蘭亭			刻板本	書
	蘭亭序	在舜欽本上	×	?	?	書
	印本蘭亭			?	?	書
	唐石本蘭亭	佳於定本	×			書
	古・蘭亭	?	×	×	×	書
	蘭亭撫本	?	×	×	×	章
	筆陣図	紙緊薄如金葉			?	書・章
	家譜		×	×	×	書・章
	奉橘帖				寶晋齋(臨本)	書
	稚恭帖	余親臨得之				書・章
	玉潤帖	字大小如蘭亭			寶晋齋	書・章
	快雪時晴帖					書・章
	筆精帖		?		臨本(法書贊)	書・章
來戲帖	字法清潤	×	?	跋(書史)	書・章	
王略帖				寶晋齋	書・章	
言叙帖		?			書・章	
黄麻紙十餘帖	字老而逸		(先君)	寶晋齋	書	
碧牋王帖		?	?	?	書	
尚書帖				?	書	

	子鸞字帖	陳子鸞	×	×	×	書
	右軍唐·四帖	右軍暮年更妙帖也			寶晉齋	書
	唐開元·右軍帖		×	?	?	書
	增概安西二帖				贊	書
	內史與王述書		?	?	?	書
	唐人·右軍丙舍帖	暮年書	薛紹彭·	?	?	書
	錢氏王帖		薛紹彭所有	?	?	書
	羲之千文	書字筆力円熟		?	?	章
	浩博帖		?	?	?	書
	官奴帖		?	?	?	章
	官舍尚書二帖	神助			跋(珊瑚)	珊
王獻之	一二月帖	不經意、天下子敬第一帖也			寶晉齋 跋(英光)	書
	日寒帖		?		臨本(法書贊)	書·章
	送梨帖	子敬天真超逸...	?		寶晉齋	書·章
	唐·范新婦帖				?	書
	臨太令法帖一卷	沈括所有				書
	刻石子敬帖	甚奇妙	?		?	書
	已復此節帖	字扎精妙、嘗撫石(?)	?	?	?	章
	臨鸞群帖	大出書帖、索余臨學				書
	王子敬帖		×	×	×	章
六朝書	晉賢十四帖		×		武帝帖臨本(法書贊)	書·章
	謝安帖(八月五日帖)				臨本(歷史博)、寶晉齋	書
	謝奕·桓溫·謝安三帖		×	?	?	書·章
	庾翼真蹟	古雅	×	?	?	書·章
	王惲真草帖		石本	?	?	章
	蕭思話表·武帝批答	此是唐人所為...	×	?	?	書·章
	王珣真草		×	?	?	書·章
	阮研草帖	奇古	×	?	?	書·章
	阮研又一帖	如竹片書...	×	?	?	書·章
	六朝古賢一幀			?	?	書
	七賢帖	偽作	×	?	?	書
	李氏衛帖	偽作	×	?	?	書
	晉魏古帖數十軸	余每入夢想	×	×	×	書
	米臨二十餘帖	每見余學臨帖、即収去。				書
	跋唐·帖	第一帖右軍帖...	?		跋あり(英光)	英
	葛玄飛白天台字		×	?	?	章
	羊欣·宋翼二帖		×	?	?	章
	蕭子雲史孝山出師頌	奇古	×	?	?	書
智永	婦田賦	虞世南出於此	×		跋(章)	書·章
	智永千文	真蹟·	×	?	?	書·章
	唐人臨智永千文半卷		×	?	?	書·章
	智永三行帖			?	?	書

	智永臨右軍五帖			?	?	書
	唐人臨智永千文	雖非真蹟、秀潤円活、逼真。		?	?	章
辨才弟子	草書千文		×	?	?	書·章
唐太宗	唐文皇手詔				?	書
虞世南	枕臥帖	毫髮乾濃畢備...			?	書·章
	十闕九帖	毫髮乾濃畢備...			?	書·章
	積時帖		借用		余嘗借·	書·章
	理頭眩藥方		×	?	?	書
	書經		×	?	?	書·章
	汝南公主銘起草		?	?	?	書·章
	汝南公主墓誌		?	?	?	章
歐陽詢	真蹟二帖					書
	故事十餘帖	老筆相連	×	?	?	書
	草書千文	改評乃跋	×	?	?	書
	鄱陽帖		×	?	?	書·章
	荀氏漢書節		×	?	?	書·章
	道林之寺碑	筆力險勁	×	?	?	書·章
	草書孝經			?	?	書
	歐陽詢三軸	暮年書、精彩動人		?	?	書
	碧牋草聖四幅		×	?	?	書·章
	衛靈公天寒鑿池帖		?	?	?	章
	歐陽詢四帖		×			章
	歐陽詢二帖		×			章
度尚庾亮二帖	豈不有神...			?	?	英
歐陽通	評書一卷		×	?	?	書
褚遂良	老子西昇經	非真				書·章
	枯木賦	搨書、借觀...	借觀	?	?	書·章
	褚書麻紙一幅		×	?	?	書
	奉書寧帖		×	?	?	書·章
	黃庭經		×	?	?	書
	臨王右軍二帖		×	×	×	章
陸柬之	頭陀寺碑			?	?	書
	又臨蘭亭·蘭亭詩一卷			?	?	書
	十八學士贊		×	×	×	書·章
孫過庭	書譜	凡唐草得二王法、無出其右	?	?	?	書
	草書千文		?	?	?	書·章
殷令名	頭陀寺碑			?	跋(快雪堂帖)	英
鍾紹京	千文	筆勢円勁...	×	?	跋(書史)	書
李邕	多熱要葛粉帖		?	?	?	書·章
	与光八郎謝惠鹿帖			?	?	書·章
	李邕三帖	一帖、淡墨淳古...			?	書
韓攄木	韓攄木八分		×	?	?	書·章

真蹟本に、跋秋深帖あり

張旭	張顛絹帖一卷	少時書	×	?	?	書
	少時絹上草書兩幅		×	?	?	書
	真蹟四帖		?			書・章
	第一帖秋深帖					書・章
	虎兒等三帖	非真蹟...	?	?	?	書・章
	賀八清鑑帖	字法勁古...	×	?	?	書・章
	“(蘇沂・)”	與真更無少異		?	?	書
	全本千文		?	?	?	書・章
	千文三帖	・石乃李師中也	?	?	?	章
	千文兩幅	暮年真蹟	?	?	?	書
	伯高五帖		?	?	?	書
	張顛草書	非伯高真蹟	?	?	?	書
李陽冰	白麻篆一卷		?	?	?	書
	黃麻篆一軸		?	?	?	書
張從申	墨蹟一卷		×	×	×	書
徐浩	贈張九齡司徒告	嘗借留余家半月	借		?	書・章
	徐浩書經		×	×	×	書
	朱巨川告	?		?	?	書
唐肅宗	行書千文		?	?	?	書
顏真卿	争坐位帖	天真罄露...	?		臨本(書史)	書・章
	峽州別駕帖	清甚	?			書・章
	糾宗碑		?	?	?	書
	祭濠州使君文	真蹟・・	?			書・章
	鹿肉帖	?				書
	不審・乞米帖		?	?	?	書・章
	魯公二帖・李太保帖		?	?	?	書・章
	文殊一幅	魯公妙迹	?	?	?	書
	顏魯公頓首夫人		?	?	?	章
	寒食帖(天氣殊未佳帖)	世多石本	?	?	?	書・章
	魯公一軸五帖		×	×	×	書・章
	送劉太冲序		?	?	?	書
	臨顏書太冲序					書
	送辛子序	屢經賞閱	?	?	?	章
	朱巨川告			?	?	書
	賜浙西節度旌勅		?	?	?	書
	南州勅史告	甚淳勁	?	?	?	書・章
	顏魯公書韻海		×	×	×	章
	麻姑山記	褚法				英
	鹿肉・馬病・逆旅書帖	渾厚淳古、合作...				英
懷素	自叙帖	前一幅破碎不存...	?	?	?	書・章
	蘇沂・懷素自叙帖			?	?	書
	懷素千文		?	?	?	書・章

	絹上三帖	留吾家月餘、臨学乃還。			?	書・章
	絹帖一軸		(一部)	?	?	書
	懷素詩一首		?	?	?	書・章
	任華草書歌兩幅	字法清逸、歌辭奇偉	?	?	?	書・章
	高坐帖	是懷素天下第一好書也	?	?	?	書・章
	懷素兩帖	少年所書也	?	?	?	書
	以詩代懷帖	老筆特妙	?	?	?	書
	草書楮紙三幅		?	?	?	書
	絹書一軸		?	?	?	書
	与皇少卿簡	筆勢簡古、老筆也。	?	?	?	書
	蕭常侍日下三帖		?	?	?	章
高閑	草書千文		?	?	?	書・章
	令狐楚詩		?	?	?	書・章
・光	・光書			?	?	書
垂栖	垂栖書			?	?	書
吳融	司空圖贈・光歌			?	?	書
裴度	杜甫詩		?	?	?	書・章
沈佺師	道林寺詩	借留書齋半歲...	(半年)		(書史)	書・章
柳公權	柳尊師墓誌		?	?	?	書・章
	紫絲鞞蘭亭詩二帖		?	?	?	書・章
	陰符經			?	?	書
裴休	題寺塔諸額	雖乏筆力、皆真率可愛。		?	?	書・章
洪元慎	集右軍越州寺碑		×	×	×	書・章
封敖	行書李文饒太尉告		?	?	?	書
唐人無名氏	白樂天詩一首	秀潤	?	?	?	書
許渾	烏絲欄手写詩一百篇	字法極不俗	?	?	?	書
陳賢	草書帖	字亦奇逸	?	?	?	書・章
唐人無名氏	歐行書兵箴		?	?	?	書
楊漢公	楊漢公書		?	?	?	書
羅讓	襄州羅讓能書碑			?	?	書
唐玄度	諸体書	粗有古意	?	?	?	書
楊凝式	楊凝式三帖	天真爛漫、縱逸...		?	?	書・章
	楊凝式數帖	真行甚好	?	?	?	書
	小字黃麻紙一幅		?	?	?	書
宋夢英	諸家篆	皆非古失矣...	?	?	?	書

以上、学書した可能性が高いものを 表示としたが、これはあくまで文献上で確実に判断、もしくは想像ができるものだけなので、これ以外のものについても米芾が学書していた可能性は非常に高い。一応、米芾が確実に学書したと言えそうなものを列举すると、

王羲之「楽毅論」「黄素黄庭経」「十七帖」「蘭亭三本」「唐刻板本蘭亭」「奉橘帖」「稚恭帖」「快雪時

晴帖」「玉潤帖」「筆精帖」「王略帖」「言叙帖」「黄麻紙十餘帖」「尚書帖」「右軍唐・四帖」「增概安西二帖」「官舍尚書二帖」「來戲帖」
王献之「十二月帖」「日寒帖」「送梨帖」「唐・范新婦帖」「鸞群帖」
その他「晋賢十四帖」「謝安帖」「唐・帖」
智永「三行帖」「智永臨右軍五帖」「歸田賦」「智永千文」
唐太宗「唐文皇手詔」
虞世南「枕臥帖」「十闕九帖」「積時帖」
欧陽詢「欧陽詢三軸」「度尚庾亮二帖」
陸柬之「頭陀寺碑」「臨蘭亭・蘭亭詩一卷」
孫過庭「書譜」
殷令名「頭陀寺碑」
鍾紹京「千文」
李邕「与光八郎謝惠鹿帖」「李邕三帖」
張旭「秋深帖」「賀八清鑑帖」
徐浩「贈張九齡司徒告」
顔真卿「争坐位帖」「送辛子帖」「乞米帖」
懷素「自叙帖」「絹帖三帖」「高坐帖」
沈佺師「道林寺詩」
楊凝式「楊凝式三帖」

となる。それにしても、目覩した法帖の多さには驚かされる。そして一帖一帖に真剣勝負で鑑識・賞閱をしていた事実を考え合わせると、その目覩が米芾に与えた影響は非常に大きかったと言わざるを得ない。上にかかげた法帖とあわせて、莫大な学書の形跡が伺える。

・米芾の学書について

・か臨か？

米芾が・本作りに励んでいた事実は で述べたが、実際の学書の際に重視したものは、・か臨か。それは『書史』の中に端的に述べられている。

畫可・。書可臨而不可・。 （『書史』119段）

・本を作るということは、自分の手元に残しておくための唯一の手段であった。むろんこれも「学

書」としての力は儼然とあるが、米芾は学書の基本、そして正当な方法は「臨」であると考えていた。そうでなくして、この文章は成立しない。また、この「臨」の大変さを米芾は理解していた。

畫・多似。人物馬牛尤易似。書臨難似。第不見眞耳、對之則慚惶殺人。

(『書史』101段)

だが、本物に似がたい苦しい「臨」こそが、「集古字」と呼ばれた米芾の力を養う第一の方法であった。

創造的臨書

レダローゼ氏の『米芾』^{xiv}には、米芾が褚遂良の蘭亭を、「創造的臨書」として高く評価したことが述べられている。だが、褚遂良の「創造的臨書」を評価するのと、自身が「創造的臨書」をするのかという問題は全く別である。米芾の臨書作品は「寶晋齋法帖」と『中国歴史博物館蔵法書大観』7巻^{xv}にあるのが代表的なものである。前者の「寶晋齋法帖」の臨書作品群に関する考察は、レダローゼ氏の同書でなされているが^{xvi}、ここでは違った面から米芾の臨書作品に対してアプローチをしていきたい。

「寶晋齋法帖」にある米芾の臨書群は、「王略帖」「暴疾帖」「孫女帖」「頃日帖」「婦母帖」「事長帖」「敬倫帖」であるが、これらの臨書は、原本と比べると、骨格の部分は似ているが、米芾の風格が前面に出てきている(図1)。更に『中国歴史博物館蔵』7巻の謝安「八月五日帖」を臨書したものは、これもまた、さきほどの「寶晋齋法帖」の臨書群と同じような形である(図2)。

だが、「暴疾帖」「孫女帖」「頃日帖」「婦母帖」「事長帖」「敬倫帖」は、「王略帖」「八月五日帖」よりも、原本よりも飛躍が激しく、米芾の持っている風格よりも、やや開放された風格を示している。例えば、「頃日帖」の二行目「傷」(図3)、「婦母帖」の二行目「傷」から「怛」への流れ(図4)、「敬倫帖」の「割」の最後の豎画から、次の「念」の第一画への流れ(図5)など。米芾の本当の臨書作品とすると、米芾の一側面を見れるものとなり、ここで意図された臨書は、また別に考察されなければならない。それに比べ、「王略帖」「八月五日帖」は、安心して見れる、堂々たる米法であり、褚遂良が臨書をすると、全く褚遂良の書となると評価した「創造的臨書」に一致した臨書作品といえる。

これより、米芾が自らの風格を前面に出した、所謂「創造的臨書」をしていたことは、確かなようである。だが、本当に創造的臨書が米芾の学書の基本スタイルであったのか。次に文献から読み取れるところを検討したい。次の文章が、それらを暗示する文章である。

余嘗以碧牋臨三帖與眞無異 (『書史』70段 李邕三帖)

壯歲未能立家、人謂吾書為集古字、蓋取諸長處、總而成之。…心既貯之、隨意落筆、皆得自然、備其古雅。（『海岳名言』）

書臨難似。第不見真耳、對之則慚惶殺人。（『書史』101段）

これらから伺えることは、米芾は忠実な「臨」をしていたということである。残念なことにその忠実な「臨」の作品が現存していないために、この議論は深めることはできない。だが、直ちに伝存している「創造的臨書」群からだけ、米芾の学書スタイルを特定するわけにはいかない。常識的に考えて、「創造的臨書」を忠実な「臨」を全く無視して行うには無理があり、また米芾の風格が表に出ていない臨書作品が、後世にまで伝わるかどうかにも疑問が残り、ここでは折衷的に、基本的な学書は、忠実な「臨」をして、また「創造的臨書」も行っていたと結論するのが妥当ではないであろうか。これはまだ追求されねばならない問題でもある。

精か博か？

黄庭堅の『山谷題跋』^{xvii}に次のような文章がある。

藏書務多、而不精別。此近世士大夫所同病。唐彦猷得歐陽率更書數行、精思學之。彦猷遂以書名天下。近世榮咨道費千金、聚天下奇書。家雖有國色之姝、然好色不如好書也。而榮君翰墨、居世不能入中品。以此觀之、在精而不在博也。

（『山谷題跋』卷5「書模搨東坡書後」）

これは、学書に際して、「博」よりも「精」なるを推奨した文章であるが、米芾は果たして、どちらのやり方であったのか。次の文章が、「精」なる学書を行っていた米芾の姿を暗示する。

是竹絲乾筆所書、鋒勢鬱勃、揮霍濃淡如雲煙、變怪多態。“清”字破損、余親臨得之。

（『書史』4段 稚恭帖）

最後の五文字によって、米芾が「精」なる学書を“知っていた”人間であることは想像がつく。そして、米芾は鑑識にたけており、またそうあるべきであると考えていた^{xviii}。この鑑識の能力は、博識であると同時に、緻密で、細かいものを見抜けるかという部分にも依存している。これは、「精」の能力に依存するであろう。また、・本などを多数作っていたと考えられることを併せれば、米芾の学書に「精」の要素が強かったことは確かである。

だが、米芾には「博」の要素も存在する。先ほどの表に掲げた法帖の数の多さを見れば一目瞭然で

ある。また、好んで新しいものを求めた米芾にとって^{xix}、「精」と「博」とは、一体であったと考えられるであろう。

期間は？

米芾にとっての学書の期間とは、どれほどであろうか。幸いなことに、それが記述されている文章が『書史』中に存在する。

嘗借留余家半月 （『書史』17段）

元祐戊辰歳、安公携至留吾家月餘、臨學乃還。 （『書史』33段）

沈板余官潭、留書齋半歳臨學。 （『書史』56段）

一番目は徐浩の「贈張九齡司徒告」、二番目は懷素の「懷素絹帖」、この年は米芾が「苕溪詩卷」「蜀素帖」を作った年と重なり興味深い。三番目は沈伝師の「道林寺詩」である。これを見る限り言える事は、意外と期間が短いことである。先ほどの議論の「精」とは矛盾するようであるが、これから垣間見える、米芾の学書のスタイルは、短期集中型「精」、それを繰り返す「博」型と見えようか。

米芾の執念

米芾が如何に一帖一帖に対して勝負感と執念を持っていたか、の最後では、収蔵という観点からその指摘をしたが、ここでは別の面からアプローチする。次の二つの文章が興味深い。

今日已懶開篋。但磨墨終日。追想一二字。以自慰也。 （『群玉堂帖』草書帖^{xx}）

關蔚宗有褚河南所撫虞永興枕臥帖。落筆精微、僅如絲髮、既存骨氣、復有精神。元章見而愛之。崇寧間、遇其子長源於京口、時蔚宗已下世。元章從長源求此帖。長源斬之曰、「惟得公陸探微師子乃可」。從之。長源復斬曰、「此畫不足以當此帖。更得公案上盈尺硃砂乃可」。又從之。長源又斬之曰、「緇思二物、皆愧於虞帖。非得公頭不可」。元章乃移書曰、「頃在揚州、蔚宗待我甚厚、示以此帖」。追想筆法、寫一通去。較其所藏。妙若刻楮、不復能辨。 （『海嶽志林』^{xxi}）

自分の思い出だけで、字を書いたというエピソード。特に後者の話はすさまじいものがある。もう一つ、米芾の文章には、夢という文字が何箇所か出てくる。

管軍苗履長子忘其名、癸未歲都下法雲寺解后去、長安一大姓村居家其石匣中所藏玉軸晉魏古帖數十軸目嘗見之。余每入夢想。（『書史』115段）

沈括收畢宏畫兩幅、一軸上以大青和墨、大筆直抹、不皴、作柱天高、半峰滿八分。一軸至向下作斜、鑿開曲欄、約峻崖一瀑落下、兩大石塞路頭。一幅作一圓、平生、半腰雲遮、下礮石數塊、一童抱琴、由曲欄轉山去、一古木臥奇石、奇古。沈謫秀日見之、及居潤、問之、云已易與人、竟不再出、至今常在夢寐。（『畫史』183段）

少性若天性、習慣如自然、茲古語也。吾夢古衣冠人授以搨紙、書法自此差進。（『海岳名言』）

實際の夢で書や画と出会う人間 - 米芾の一帖一帖に対する執念、書画に対する執着は異常であったと言わねばならない。

・おわりに

以上、米芾の学書という観点で色々な考察をしてきたが、なかなか首尾一貫したものにならず、稚拙な議論が多かったようにも思われるが、本論文で検討したことについて、簡単にまとめたいと思う。

臨本・・本の手腕

鑑識の手腕・目靨について

勝負感と執念（楽しみと表裏一体、チャンスの少なさ）

精（短期集中型、忠実「臨」と「創造的臨書」？）と博（量、新しい入手）

最後に、今まで色々研究されてきた米芾の文献などを、学書という観点から見ると、まったく違った面白さが発見できるということ。なかならず、現代との距離、接点、そして北宋の雰囲気を追求するに、この学書という観点から様々な文献・資料などを組みなおしていくことは、非常に興味深い課題であると感じる。

i 当時、「淳化閣帖」が完成をしており、米芾もそれを目撃していたと思われるが、米芾自身は、それをあまり尊重しなかったと思われる。

ii 『書史』は、米芾晩年ごろに完成したと思われる著作。成立年次は不詳。今回使ったテキストは、百川学海である。段数はこのテキストに従って、段落が変わるごとに筆者がつけていったもの。

iii 『畫史』は、『書史』と同じく晩年に完成したと思われる著作。成立年次もまた不詳。今回使ったテキストは、叢書集成に収められるもので、津逮秘本を底本としたものである。段数のつけ方は『書史』と同じ。

iv 『寶晋英光集』は、米芾の詩・賦・詞・序・跋・贊・文などを収集して作られたもの。今見られる形になった経緯には色々な問題がある。今回使用したものは、叢書集成所収のもので、涉聞梓舊本を底本としたものである。

v この文章、最後の部分が不可解であるが、前の部分を受けて、「米芾が臨書したものが真蹟となされて色々なところに刻石されているが、そのようなものは、王羲之のものをもっとも多い」と解釈するのが、今のところは一番自然であろう。

vi 「寶晋齋法帖」は、今でも拓本を見ることができる。「寶晋齋法帖」についての詳細は、中田勇次郎氏の論文「宋拓寶晋齋法帖」(『中国書論集』二玄社・1970)に見られる。

vii 『寶章待訪録』は、米芾が36歳の時(1087)に完成させた著作で、目録・的聞の二部から構成されたものである。今回使用したテキストは、百川学海である。

viii 米芾自身の作品の他、中田勇次郎氏の「米芾の作品」『米芾』研究篇(二玄社・1982・4・10)を参照した。

ix 米芾は、この官僚としての事務処理の書を嫌悪した、もしくは好まなかったと思われる節がある。それは次の文にあらわれている。

因爲邑判押、遂使字有俗氣。右軍暮年方妙、正在山林時。吾家收右軍在会稽時與王述書、頓有塵氣、又其驗也。
(『寶晋英光集』補遺)

x もちろんそれらの中にも、芸術として強く認識されたものと、普段の字として書かれたものの違いもあるだろうし、色々なきっかけや条件、文の内容などによっても書する際の意識はかわったであろう。私自身が見る限り、一番普通に書かれたものとしては、尺牘であり、一番意気込みが感じられるのが詩巻である。特に「蜀素帖」などは、米芾が若いときに書かれたものもあるかもしれないが、他書に比べて意気込みが群を抜いていると感じる。その中間として、跋の存在があり、これは北宋の士大夫の間で盛んになったと言われるものである。こうした前提があった上でそれでも、ここで私がした指摘というのは、考えなければならない過程であると信ずる。

xi 『海岳名言』は、もともと『墨莊漫録』に米芾の「論書一篇」「雜書十篇」(張太享に贈ったもの)が記載されていたのを、後人が『海岳名言』として25段に編纂したものである。邦訳が中田勇次郎編『中国書論大系』第4巻(二玄社・1981)にある。

xii 『米芾』中田勇次郎著(前出)所収

xiii 中田勇次郎著『中国書論集』(二玄社・1970)

xiv 『米芾 - 人と芸術』(二玄社・1987・11)

xv 『中国歴史博物館蔵法書大観』7巻(柳原書店・1994・11)

xvi 『米芾 - 人と芸術』P 152~163

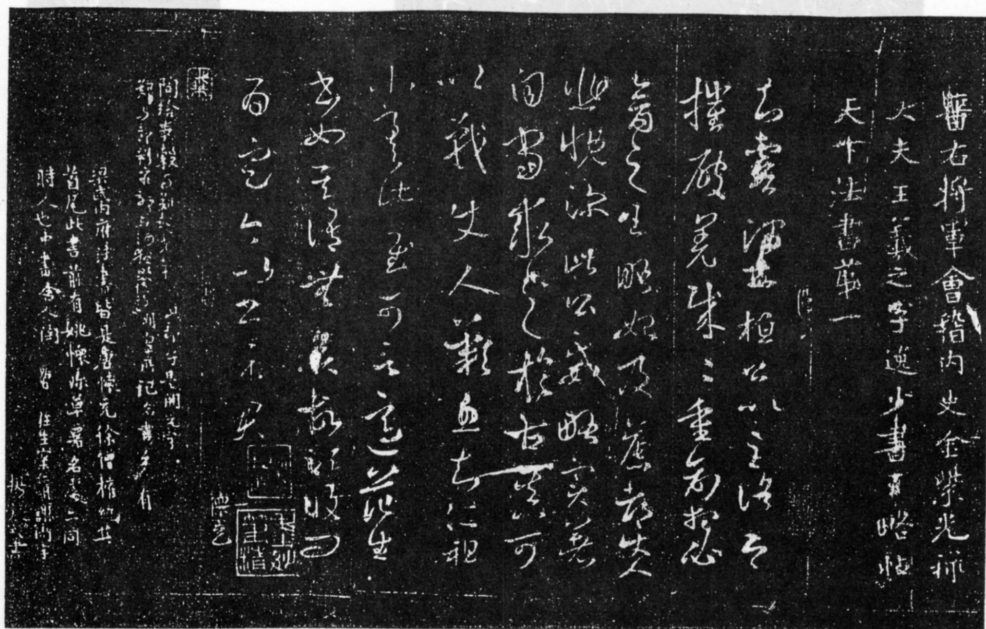
xvii 『山谷題跋』は、黄庭堅の題跋集で、書に関するものは2巻に分けて収録されている。邦訳に中田勇次郎編『中国書論大系』第4巻(二玄社・1981)がある。

xviii 本論文の 章を参照

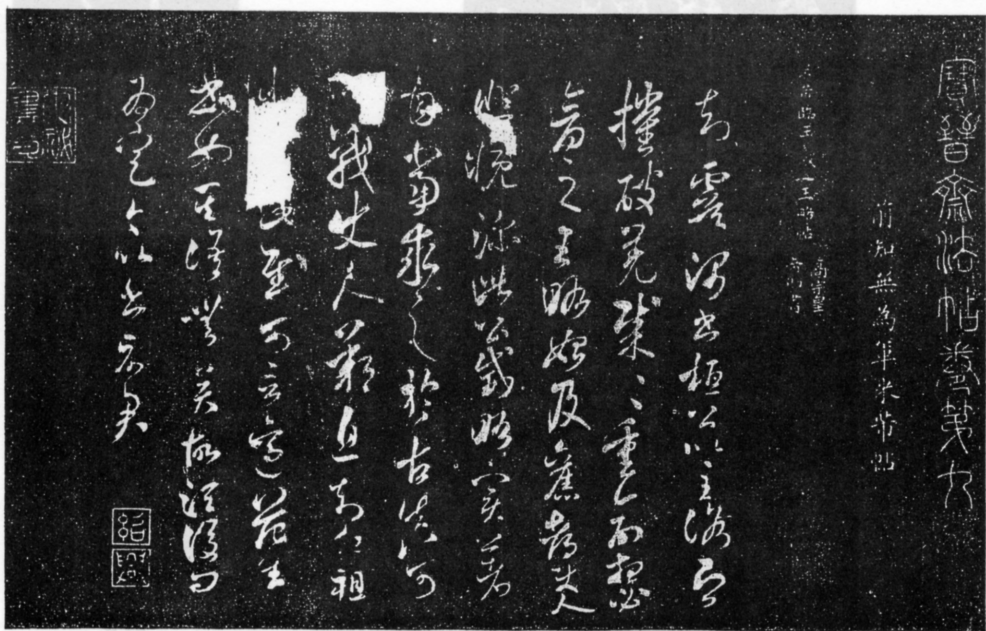
xix 本論文の 章を参照

xx 群玉堂帖「草書帖」、西川寧他監修『書跡名品叢刊』43(二玄社・1970・9)で見ることができる。

xxi 『海嶽志林』、明の毛晋撰。叢書集成所収、底本は得月簪叢書本を使用した。

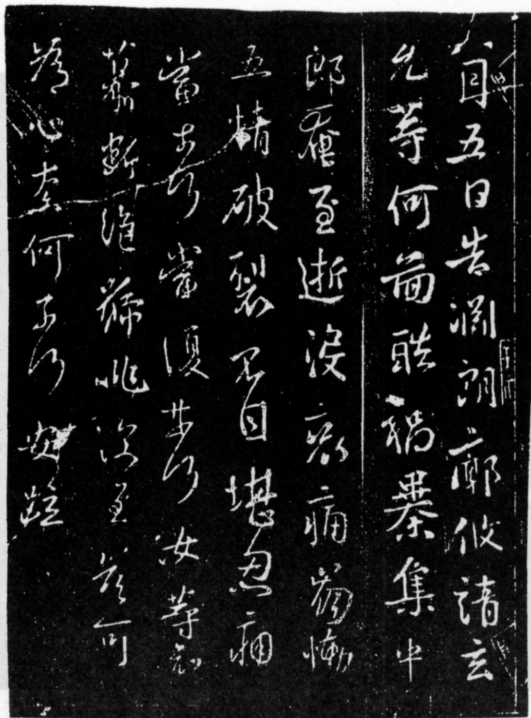


王羲之「王略帖」



米芾臨·王羲之「王略帖」

图 2



謝安「八月五日帖」



图 3



图 4



米芾臨·謝安「八月五日帖」



图 5